
転落男性論

孤立, 暴力, ホモソーシャル

西井 開著

金剛出版, 四六判 240 頁, 3,300 円, 2026 年 3 月刊

(立命館大学) 中村 正

著者は男性学研究者であり臨床家でもある。心理相談にやってくる男性を研究しているという意味ではない。取り組んでいるのは男性問題の相談であり、そこでは男性性が臨床の対象になっている。男性性は男らしさとして社会的規範のように作用している。いわば天蓋のように覆う。それに囚われ、現実の自己との違いに悩む男性がいる。天蓋なのでそこに向かって上昇しようとする。しかし首尾よくいかない。男らしさは競争として機能しているのだから、到達できない男性が多いし、そもそも男らしさは定義できない迷宮のようなものでもある。失墜しがちな男性たちである。

こうした男性たちの苦悩を把握しようとしてきた男性学は成功してきたのかと著者はいう。男性を縛ってきたのは、その天蓋に向かう、「男らしさを達成したいという上昇の願望ではなく、ここから転げ

落ちたくないという不安ではなかったか」と著者は問いを反転させ、男性学の刷新を試みる。天蓋ではなく地蓋としての床面から崩れ落ちそうになることの不安をこそ把握すべきというのだ。

非モテ研究グループ、DVや虐待の加害男性グループを通した男性同士の経験の語りあいを読み解きながら、具体的に転落について考察する。そこには劣位に置かれることの恐怖があるという。男性の仲間集団から排除されることへの恐れ、DV、モラハラ、パワハラの加害者とされる恐れもある。足元の不安定さと格闘している事態の把握が男性性研究の焦眉の課題だと指摘する。そのためには個人を扱う心理学でもマクロを扱う社会学でもない臨床社会学の知見が有効だという。「転落の恐怖という心理的なメカニズムを、男性ジェンダーや、集団との関係性、階層性、性差別などの社会構造との接続において把握すること」を目指す。引用されている男性たちの語りから「これ以上、落ちたくなかった」という転落への不安の声が聞こえてくる。臨床社会学は悩みを抱えた個々の男性という木を見て、社会のなかにある男性性という大きな森を見る営みである。

内容は、集団内の序列化と排除および男性の行動に焦点を当てた第Ⅰ部、差別・暴力・糾弾に怯える男性の課題を扱う第Ⅱ部、転落の恐怖への専門家の対応を論じる第Ⅲ部から成る。上昇を前提とした男らしさの抑圧ではなく、転落への恐れと不安を示す男らしさへの固執の分析に膝を打つ。拓かれていく男性性臨床の基礎的文獻となるだろう。

しかし、どちらにしても「縦」の関係である。やはり男性性を論じることは上下関係のたとえになるのだろうか。アップ（上昇）でもなくダウン（転落）でもないシフト（転換）を評者は唱えてきた。「横」への展開である。著者はすでに男性同士のグループワークでそれを試みているので、臨床から生成させた「横」の理論も読みたい。脱暴力も含めた希望の男性学となるだろう。さらにその上で、「縦」から脱皮しつつ、しかし「横」に並ぶだけでもない、「斜め」（松本卓也（2025）『斜め論』筑摩書房）への／からの視野と交差させると面白くなると思った。